

二〇二一年度 岡山大学 国語

問題一

問一	ア	イ	ウ	エ	オ
	脳裏／脳裡	規則	提案	策	錯誤
問二	東京オリンピックでは、開会式や閉会式で使われている音楽やオリンピック讃歌の扱い、競技のスタートの号令、場内アナウンスなどあらゆる場面で、現在のわれわれの抱くグローバル化というイメージとは違うやり方で国際化がなされようとしていたということ。				
問三	一九二七年に出発合図に使う号令の邦語化が起きたことについて、今のわれわれの感覚ではローカルな日本語を捨てて英語を採用することの方が自然であって、逆の動きは考えられないから。				
問四	自国語を用いた文化形成が近代国家になるために必須であると考えたから。				
問五	かつて日本人は、自らの文化を確立しつつ、それを他に対して理解してもらおうと努力することを通して「国際化」をすすめており、それは現在われわれがもつ、グローバル化の名の下に世界の基準が画一化されるという意味での「国際化」のイメージを相対化させ、日本文化の歴史や現在についての新たな視界を開いてくれるということ。				

問題二

問一	ア	イ	ウ
	左往	肩	息
問二	学校の畑を耕しに来た馬が、無理な作業で前脚を折る怪我をし、駆けつけた獣医によって安楽死させられたというもの。		
問三	馬を操る林先生がとても下手なので、何か起こるのではないかと不安に思っている。		
問四	Aでは「雄一は」と取り立てて主語を示し、Bでは「頑として」という語句をつけ、A「残った」を「居残った」という形で繰り返すことで、気持ちの高まりを表した。		
問五	雄一は、今回の馬の怪我と死の原因に納得できる明確な答えがほしかったが、父親は、原因を誰か一人に帰すべきではないと考え、自分に課された責任のみを従容と引き受けようとしているだけであったから。		

問題三

問一	①	不安であるのも一通りでない
	②	歌もいっそう大人びてきた
問二	③	子を思う親の心の迷いからくる見誤りであろう
	延暦寺	
問三	母上が旅の途上で草を枕にして仮寝をしている夜々を思いやると、都にいる私の袖も涙で濡れてしまうことよ。	
問四	「ふり（振り）」と「鈴」	
問五	息子が相が詠んだ五十首の歌を亡夫為家が見れば、その成長ぶりにどれほど喜ぶだろうかと想像され、亡夫に代わって、思わず声をたてて泣いてしまうほど嬉しく思っている。	

問題四

問一	つねにあらざして	
問二	午	
問三	わづかにてんすうしやくあるのみ	
問四	峡谷から雲や霧がかかる山々を見ることは、満ち足りた気持ちになることだなあ。	
問五	世に伝わる巫山の絵画はことごとく本物とは思えず、筆者はおかかえの画家に、長江の中ほどに小舟を浮かべて景色を模写させ、初めて巫山の美しく真実の形態を忠実に表現したと考えたから。	